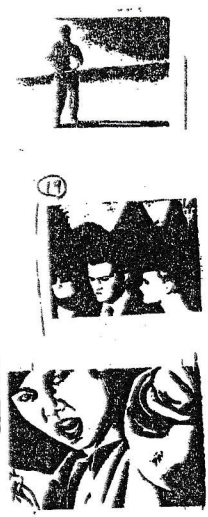


上野千鶴子
ジェンダーの文化研究
光文社



学生にとつての「ジェンダー」と「恋愛」



山形大学助教授
河野 銀子
1989年武蔵大学卒業。95年上野千鶴子大学博士課程修了。専攻は教育社会学、ジェンダー研究。著書に『理科嫌いの女子は進路一途で全日本学生連盟のメンバー 分冊一社出版、日本評論社 2004年』ほか。

「つぎの授業の彼が、「おまえを守る」って言うんで、私は、弱くないし、いまでも男に傾いて生きてきた感はないの、なんか腹が立ちます。」

—彼女へのフレンドに、花束を頼むとき「ラブレスはピンポイント」と言うのは、ジェンダーの問題だと言う。でも、自分はそのようにして来たんで、(笑)。

—「男はモテない」という風潮が、女性にだけではなく、男性の中にもある気がします。まあ、かつての彼女も、いつも「性交渉をしない方がいいんじゃないですか、でも、男同士の恋愛は、した方がいいかも」というような関係。

—「好きだった相手を、同じ性しか愛せない」とか「昔の彼女に比べて、今の彼女は、いいかわからなくなりました。そうい入もっている頭ではわかっていて、ショックのようなコメントとして、「ジェンダー」として、「ジェンダー」に関する授業の感想に口添えで現れるのだ。大学は大学化し、学生に伝えている。



「好きだった相手を、同じ性しか愛せない」とか「昔の彼女に比べて、今の彼女は、いいかわからなくなりました。そうい入もっている頭ではわかっていて、ショックのようなコメントとして、「ジェンダー」として、「ジェンダー」に関する授業の感想に口添えで現れるのだ。大学は大学化し、学生に伝えている。

「好きだった相手を、同じ性しか愛せない」とか「昔の彼女に比べて、今の彼女は、いいかわからなくなりました。そうい入もっている頭ではわかっていて、ショックのようなコメントとして、「ジェンダー」として、「ジェンダー」に関する授業の感想に口添えで現れるのだ。大学は大学化し、学生に伝えている。

大学は大学化し、学生に伝えている。大学は大学化し、学生に伝えている。大学は大学化し、学生に伝えている。

大学は大学化し、学生に伝えている。大学は大学化し、学生に伝えている。大学は大学化し、学生に伝えている。



武内 清樹

武内 清樹 (上野千鶴子助教授)

大学の授業内容は抽象的で興味乾燥ものが多く、学生の身近なことに結びつき、恋愛問題にまで関与できるテーマは少ない。ジェンダー問題はその数少ないテーマの一つであろう。

性差は生物学的要因によって決まる当たり前の差と想っていた学生の思考を揺るがすのは、大学の授業である。社会学者の井上俊之が言うように、運命や生まれながらのものと思われていたものが、人間が作った制度や文化の産物であることがわかったとき、人間の思考は自由になる。人間が作ったものであるのなら、人間の手で変えることができる。

武内 清樹 (上野千鶴子助教授)

大学の授業内容は抽象的で興味乾燥ものが多く、学生の身近なことに結びつき、恋愛問題にまで関与できるテーマは少ない。ジェンダー問題はその数少ないテーマの一つであろう。

性差は生物学的要因によって決まる当たり前の差と想っていた学生の思考を揺るがすのは、大学の授業である。社会学者の井上俊之が言うように、運命や生まれながらのものと思われていたものが、人間が作った制度や文化の産物であることがわかったとき、人間の思考は自由になる。人間が作ったものであるのなら、人間の手で変えることができる。

武内 清樹 大学とキャンパスライフ
上野千鶴子出版
2009

「ジェンダーで学ぶ社会学」
伊藤公雄 著
毎田和志 編
世界思想社
1998

ジェンダーの視点から現代社会を読む

▷セックスとジェンダー

ジェンダーとは、オス、メスといった生物学的な性のあり方を意味するセックス(sex)に対して、文化的・社会的・心理的な性のあり方を指す言葉である。簡単に言えば、「男はこう(あるべき)」「女はこう(あるべき)」といった社会的枠づけや、「男らしさ」「女らしさ」といった「らしさ」を意味する。セックスは、自然が生みだしたもののだが、ジェンダーはそうではない。ジェンダーは、人間の社会や文化によって構成された性なのである。

学ぶ—学校へのそのセクシズム

木村 淳

▷「学校知」にジェンダー

学校は、社会で有用とされる知識や技能を身につけさせる場である。そうした学校機能を前提として、学校で教えらるべきとされる知識は、特権的な地位を有している。学校という権威によって正統化された知識。「学校知」におけるジェンダー・バイアスをみてみよう。

学校で教えられる教育内容の体系であるカリキュラムは、学年/年齢を例外として、基本的には学習者の属性と無関係に設定されている。しかし、性別に関しては、女子と男子では教育内容が異なっている場合がある。日本のフォーマルなカリキュラムにおける、その代表例が家庭科である。従来、小学校の家庭科は男女共修であったが、中学校では男子は技術科、女子は家庭科を中心とする学習

し、高校では家庭科は女子のみ必修と定められていた。カリキュラム編成上、家庭科は女子むきの教科として位置づけられ、「女は家庭、男は仕事」という固定的な性別分業にむけて、子どもたちを社会化するという機能を果たしていた。女性差別撤廃条約批准にもよらず、学習指導要領が改正され、中学校・高校でも家庭科は男女共修となったが、内容を複数の領域に区分して選択させるという選択必修制であるため、実質的に男女別学を容認する不徹底な改正に終わっている。

フォーマル・カリキュラムについては、男女別になっている領域は一部にすぎないが、男女同一内容の教科についても、その教育内容をジェンダーの観点で洗い直すところまざままな問題がみえてくる。教科書は、教えらるべき教育内容を印刷物のかたちで具体化したものであり、日本の学校教育においては通常、授業運営上きわめて重要な位置を与えられている。これまでおこなわれた教科書分析から、教科書はジェンダーに関してつぎのような特徴をもつことがあきらかになっている。

まず第一には、教科書は圧倒的に男性優位の世界になっているという点である。編者や執筆者のほとんどは男性であるし、登場人物も女性より男性のほうが多い。国語や道徳の教材の主人公や、社会や理科、算数の挿し絵の登場人物など、ことごとく女性の数よりも男性のほうが多いのである。女性の登場人物の少なさは、学習活動の、ひいては社会活動全般の主人公が男性であること、女性はそ

のわき役的存在でしかないということも暗黙のうちに伝えている。

第二には、教科書はステレオタイプ化されたジェンダー・イメージに満ちているということである。たとえば、国語の教科書の登場人物の性格は、男性の場合活発で活動的であるのに対して、女性はお

となしく、泣き虫といった設定が多い。社会学や家庭科、生活科、道徳、英語などの教科では、女性が家事・育児で男性は仕事といった性別分業を当然視する記述や挿し絵が多くみられる。男女の特性や役割についての固定的なイメージは、さりげなく教科書の世界にちりばめられている。子どもたちは、文章を読みとる力や地理の知識、英語の文法などを学ぶと同時に、ジェンダー・イメージについても学びとっているのである。

▷教師と生徒の相互作用

学校生活における教師と生徒のやりとりのなかにも、ジェンダーの問題が見いだされる。欧米ではジェンダーの観点から教師と生徒の間の相互作用を觀察した実証的研究が数多くなされ、それらの多くが、教師と生徒の相互作用には子どもの性別によって違いがあることをあきらかにしている。以下、欧米の研究結果を紹介しよう。

まず、教師からの子どもたちに対する働きかけについては、女子よりも男子のほうが目目されており、より多くの賞賛や叱責、援助を受ける傾向があることが、多くの調査によってあきらかにされている。子どもたち自身の活動についても、男子のほうに授業中により活発に発言し、議論に参加している。教師との相互作用においては男子が優先される傾向を背景として、積極的に発言する行動的な女子生徒以外、多くの女子は一部の男子のように騒ぎを起こしたりすることもなく、良くも悪くも教師の注目を引くことが少ない。そうした「おとなしい」女子の子たちは、教室のなかで目立たない存在となりやすいのである。

また教師は、女性と男性に対するステレオタイプ・イメージにもとづいて、生徒たちを評価し指導をおこなう。たとえば教師には、「自立心はあるが、乱暴」といったステレオタイプでとらえる傾向がある。また、いわゆる「女らしさ」「男らしさ」の概念に適合する子どもとそうでない子どもというカテゴリで生徒たちを類型化して認識し、女性・男性として「典型的でない」生徒を「異常」な存在として問題視することもある。とりわけ、「めめしい」(sass)と定義された男子生徒は、教師から疎んじられるという。

▷性的役割のトラッキング

日本では第二次世界大戦敗戦後、教育の民主化によって教育における男女平等の原則が確立された。男女共学、高等教育の女性への門戸開放など、教育の機会が平等に開かれて半世紀、結果として教育における男女の平等は達成されているのだろうか。

一九九六年度の高校進学率は女子約九八%、男子約九六%、大学、短大進学率は女子約四八%、男子約四四%である。かつてはいずれも男子のほうが進学率が高かったのだが、現在、数%の差とはいえ、女子の進学率のほうが逆に高くなっている。この数字だけを見ると、今日では教育上女子が劣位におかれているといった問題は存在しないようにみえる。

しかし、もう少し詳しくみていくと、事態はそれほど単純ではないことがわかる。高校教育については、普通科以外の学科では男女比の割合が大きいが、工業・農業・水産といった学科では男子の割合が、商業・家庭・看護といった学科では女子の割合が大きい。また、高等学校全体のうち約一割が男女別学となっている。また、高等教育進学の内訳をみると、男子の場合はほとんどが四年制大学への進学であるが、女子の場合は、その半数が短期大学への進学となっており、さらに、四年制大学のうち一割弱、短期大学のうち六割弱は女子大学である。専攻分野をみると、人文科学系や家政・教育・芸術関係の学部では女子の比率が高いが、社会科学系、理学・工学系の学部では低い。あらゆる専攻分野において男女比の不均衡がみられ、それぞれの分野には暗黙のうちに女子むき、男子むきといった性格づけがなされている。

「歴史的に女性の教育や知識活動の場から遠ざけられてきた。現代社会においても、女性の教育の領域の画定された位置づけられている。『学校知』が性別によって不均等に配分されているのである。しかし、問題は『学校知』の不均等な配分だけではない。前述したように、『学校知』の内核そのものが『男性中心』に構成されている。『学校知』とは、われわれの社会における知識や文化の中心として、その基礎である言語を支配している。言語および知識活動をジェンダーの観点から考察したド・ヌンクナーは、『男性言語を支配している。したがって言語は男に都合がよいように働いている』(『男性は男が支配する』)と指摘している。私たちは、男女の特性や役割の違い、性別による知識の配分が、われわれの文化や言語を支配していることをよく意識しなければならない。」



エリクソンが金銭用語から「理想へ転用した」と言及する「マトリヤム」という用語は、青年期心理の一種として「成熟回遊」とも訳され得る。...

「パラサイト・シングル」たちは、たゞ経済的に自立可能でも一人前とは見なされず。...

結婚してよかったという。近頃ではともに結婚率が上昇する。...

それ以前、近代社会には、生涯非婚者が人口の二割近くいたことがわかっていく。

低く、アゲインとなる可能性が高くなった。結婚の安定性は、はたくなかった。...

上野千鶴子

結婚のスタイルも多様化した。同居しているのに別け出ししない事実婚カップルがいる。...

人生八十半時代。たとえ結婚していても、人によってシングルである期間の方が、カップルである期間よりも長い場合もある。...

三 近代家族の解体と革命

金銭結婚の成立の背後には、近代家族とそれを支える規範、すなわち愛・性・結婚の三位一体を語るロマンチックな物語、イデオロギイがある。...

結婚してもなくても生活は待てるし、結婚してもしなくても親になる。...

そうならば結婚相手への期待の内容も変わる。この女性たちはかならずしも確固なシングル主義者ではないことがわかっていくから、その結果、晩婚化・非婚化が進行する。

五 所謂無用のフリーランス社会

だが、フリーランス的な生き方を、「正社員になる」までの移行期と考える男もいる。...

不況になれば、労働統計のなかで、自営業者の比率が上昇する傾向がある。...

(参考文献)

- (1) 酒井順子「負け犬の遠吠え」講談社、二〇〇四
(2) 牛嶋恵「おひひり」同上
(3) 山下久美子「おひひり」中央編訳社、二〇〇四
(4) 海山正子「おひひり」中央編訳社、二〇〇四

「おひひり」は、日本経済新聞社、二〇〇四
「おひひり」は、中央編訳社、二〇〇四
「おひひり」は、中央編訳社、二〇〇四

小倉千加子「結婚の条件は、年収が何万円か」

今まで、男子学生が書いた一番具体的な条件は、次のようなものであった。
「僕は、相手の人に難い条件は出しません。...

「私が結婚相手に望む経済力は、そんなに大きなものではありません。...

「なんでも、女の子のほうがいいです。あと、僕が帰ってきたときに家にいて待っていてくれる人、そうです。...

「どうい、学生の書いたものを何年も多数読んできて、私はこの国の晩婚化は止まらな...

「家庭を維持しないから、就労意欲が低下し、ますます離職が促進される。...

